

## まえがき

庭という言葉は不思議なものです。

京都などの古都にある寺社仏閣にある有名なものは代表的な庭のイメージだと思います。

もちろん個人の家にあるのも庭。都市では公園はもちろん街路樹、石碑なども庭であるとも考えられます。

また庭という言葉には、神秘的かつ神々しいイメージもあり、実際に北海道の大雪山という山には「カムイミシタラ（神々の遊ぶ庭）」という清らかな名もあります。

これらに共通するものは山や川の大自然はもちろん樹木、石などを含めた自然があるということです。でも皆さんの中



には癒やしの空間と漠然とイメージされた方もいらつしやると思います。不思議です。樹木も石も少し探せばその辺にあるものですが、庭と聞くだけで癒やしの空間をイメージするのは不思議なことです。となると庭の定義は何？ と学術的になつてきますのでこのたびは深く考えず、皆さんの頭にある癒やしの空間である庭のイメージでお話しさせていただこうと思います。

世の中で、風雨にさらされて時間が経つにつれてよくなるものは庭だけではないでしょうか？ また何が完成で何が未完成と区別がわからないのも庭というものでないでしょうか？ 今や物が溢れている時代で、次から次に新しい商品が開発、販売され消費者は古い物を捨て新しいものを手に入れる。庭の世界も同じように新しい庭木が品種改良され発売されたり、遠く秘境の珍しい植物を探してきたり、いろいろと似たようなこともあります。しかし庭の本質は、ずっとそこにあることだと思いません。そしてそれらが成長し、四季折々の変化を楽しませてくれ、かつ経年の変化を自分と自分の周りの環境を重ね合わせ楽しむものだと考えます。

私たちは日頃からさまざまな施主の庭に伺うことが多く、付き合いも長くなることが多いです。そのためその家庭と庭の雰囲気がよく合致していることをよく感じます。庭という漢字は家庭と

いう文字の一部にも見られるように反映されているのでしよう。すなわち庭つて人そのものなのです。その人を映す鏡なのです。しかも庭木、石などの庭を構成する素材は一代以上長生きしますので、代々受け継がれていくべきものですのでその人のみならずその家庭、家系まで反映されるものでしよう。

しかし、現代ではそのような考えや感性をお持ちの方も少なくなりましたし、職人の方もそのような考えを持つて誇り高く仕事をしている人も減っているように感じます。時代も早い、楽であるという合理的な考えが進み、人口も少子化の傾向にあり時代の流れだから仕方ないかもしれませんが、私はそういうのを言い訳にするのは性に合わなくて、むしろこういう時代だからこそ真剣にこれからの庭のあり方を考えなければいけないと感じます。

これからはグローバル化が進み、世界を視野に入れて日本の庭という考えを持たなければいけません。

海外の方は、日本に来れば必ずと言つていいほど庭を見て帰ります。そして賞賛されています。それほど値打ちのある庭という文化を維持、発展させていくには皆様の庭に対する理解を深めていただ

く必要があります。この業界の職人さんはもちろんのこと、若い世代にも、そして実際に庭をお持ちの方が理解されるよう、少しでも庭のことを思っていたらだければと思います。

まず簡単に私のことを話しますと、現役の庭仕事している植木屋です。

家業がそうではなく、私の意志でこの業界に足を踏み入れました。やるからには本場で修行したいと思いい京都に住み込みで修行に行き、現在は生まれ育った地元に戻り、小さいながらも数人の職人さんと日々腕を磨いています。

## 庭師と植木屋

よく耳にするこの二つの呼称ですが、同じです。ただ私は植木屋と言います。といいますのも京都での修業時代に親方より「わしらは植木屋や。庭師というのは周りがそう呼んでくれる名前や。自分では名乗るな。庭の師匠なんて自分で言うてたら先が知れてるわ。庭というのは常に変わっていくものやからな。偉そうになつたらあかん。常に勉強や」という言葉が頭に残っているからです。

その当時は本場京都の技術さえあればどこでも通用すると幼い考えで、今その言葉の深さを思い

知っています。

庭はその人を映すもの。時代を映すもの。そのように高尚なものを相手に仕事をさせていたでいるのに、自らのことを師と呼ぶことは怠慢でしかありません。しかも扱う材料は自分より長生きするもの。それ故に謙虚にしなければいけません。その心こそが親方の言いたかったことだと考えます。

また扱う材料からもたくさんのかさを学びます。人は人から学ぶことは比較的簡単です。人は言葉を持っていきますので、こちらがしっかりと聞く耳を持つていればさまざまなかさを学ぶことができます。われわれは毎日庭と向き合っていますので庭から学ぶことがたくさんあります。しかし庭は言葉を持っていませんので、私たちが歩み寄りなければいけません。しっかりと見て、音を聞いて、匂いを嗅いで、肌で感じてと五感を磨き上げて感じ取らなければいけません。石は雨が降ろうと雪が降ろうとずっとそこに座っているのです、その忍耐力を見ることができません。また雑草は何度抜かれても出てくる、アスファルトのちよつとした隙間からも出てくる強さ、雑草魂と言われるハングリーさです。あとわれわれ、本職目線から見ると、木々は弱つてくると自ら枝を枯らしたりします。葉っぱはご存じの通り水分を蒸散しますので、木々は自分の体力と相談して、「これ以上水分が蒸発したら私自身枯れ

てしまふな、じゃあ一部の枝を枯らして水分蒸発量を減らしてしまおう」とせっかく美しく広がった樹形をあつさりあきらめて生きる道を選びます。こういう行動を人間と比べると、人はある程度、地位財産を築くとそれらを放したくなくていつまでも固執する醜い性分もありますので、そういうのと比較するとその潔さ、身の丈にあつた生き方をしている木々を尊敬します。潔さとかは人の美意識の中にあるのですが、なかなか実行するのは難しいです。

というふうに庭の中をよく観察して、と言いますか庭も庭木も話しませんので、私たち自ら庭の気持ちになつて考えてそういうことを感じます。本当に庭からはいろいろと教えてもらえます。

あと、庭というものは無意識に人に訴えるものがあります。何も話さないのです。先述しましたが人を映す鏡ですので、見る人にどう映るかです。その庭は、古都の有名な石庭とかではなく、ご自身の庭にあると思います。木一本あるだけで立派な庭ですので、この忙しい現代にちよつと時間を作つて、お茶やコーヒーでも飲みながら、リラックスした雰囲気その木を見てください。いろいろな発見があると思います。この木の葉っぱの色は漠然と緑としか思つてないかっただけど、よく見たら淡い優しい緑色だとか。この木の枝はまつすぐ上に伸びるなどか。この石はよく見たら鯉の形になっているとか、そういう発見がたくさんあると思います。

また庭の中で変化するものは木でして、同じ樹種でも一本一本の個性が違います。この木の特徴は、他の庭木と違って個性のある部位はどこであるということをおぼえて手入れされた庭木はほんとに美しいものです。プロの人、一般の人問わず、心を打つものです。これも樹齢何年とか有名なお寺にあるとかではなく、ごくごく一般のお宅にある庭木に言えることです。今では枝がごちゃごちゃして手遅れでは？ と思われる方も多いと思いますが、今からでも仕立て直すことは可能です。ただし生き物相手ですので時間がかかります。しかしそうして美しくなっていく姿を見るのも一つの楽しみです。庭木の善し悪しがわかるというのは心が豊かな証拠です。職人は腕の向上を心がける。お客様はその見る目を養う。そうすることで庭を通じてそれに係る人すべての心の満足感が上がると思いますが。素敵な関係ですね。

最後に庭に携わる方々へ。

私のような存在が執筆とは恐れ多いですが、私なりの見聞を基にお話させていただきます。

最近の職人は、職場を点々としていたり、辞めたりして続かないという話をよく聞きます。自分の思っているのと違うとか親方と合わないとかの理由で。

どこで習おうが同じです。自分の努力次第でどうにでもなる。人のせいにする前にまず自分で努力

してください。日本には庭がたくさんあります。本も溢れるほどあります。ちょっと足を伸ばせば雄大な山々がたくさんあり、その景色はもちろんのこと、その森の中には何百、何千という種類があります。こんな恵まれた環境で育っているのに文句が出るのは自分の努力が足りないだけだと思います。あと部下を持つ皆様へ、職人は一人ひとり個性があります。庭の素材も一つひとつ個性があります。縁があつて来てくれた職人ですので、その個性を組織という庭にどう生かすかが植木屋の力量だと思います。もう時代は昔のような丁稚奉公時代ではないと思いますので、庭に興味を示した若い子を上手に育てあげていってほしいと切に思います。

これからの庭のために、庭に係るお客様、庭の世界に身を置く職人さん、そして親方職へ少しでも私の考えが広まればと思い、慣れない筆を執り不器用ではございますが本書を書かせていただきます。